

読解力を高める授業づくり

—小学校国語の文学的な文章教材を用いて—

学習開発コース (09220903) 及 川 渚

本研究の目的は、「読解力向上に関する指導資料」と「小学校学習指導要領【国語】」とを関連付けた授業を実践することと授業を構想することである。そこで、教職専門実習Ⅲで行った「一つの花」の授業実践について、児童の作品を中心に分析し、考察した。そこからは、目的を意識しながら文章を読むことや思考の過程が積み重なる言語活動を設定すること、自分の考えに対して根拠や理由を持つことが重要であることが明らかになった。

[キーワード] 読解力、授業づくり、文学的な文章、テキスト、作品分析

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景、研究の目的

筆者は昨年度、複数のテキストによる授業についての研究に取り組んだ。今年度は、昨年度の到達点と課題を受け、より具体的なテーマとして「読解力」に焦点を当て研究を進めることとした。

平成 17 年 1 月に文部科学省は、OECD による生徒の学習到達度調査(PISA2003)の調査結果を発表した。この調査は、義務教育修了段階の 15 歳児が、その持っている読解の知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題においてどの程度活用できるかを評価することを目的としている。PISA 調査のねらいとするところは、学習指導要領で子どもに身に付けさせたいと考えている資質・能力と相通じるものである。したがって、読解力を向上させるためには、学習指導要領の徹底が重要であると考えられている。また、PISA2003 の調査結果での我が国の子どもたちの「読解力」が低下傾向にあるという課題を受けて、平成 17 年 12 月には文部科学省より「読解力向上プログラム」が出された。その後、PISA2006、PISA2009 の調査結果が公表されており、以前よりは回復の兆しが見られる。しかし一方では、一時的なものであるという見方や、授業で培った能力だと断定することはできないという指摘もある。

また、現行学習指導要領の「国語」においては、中央教育審議会(1998)の答申に沿って、「豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成する」という視点で内容の改善が図られ、「自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表

現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てる」が重視されている。

これらのことから、来年度から全面実施される「小学校学習指導要領【国語】」を踏まえた上で、テキストを効果的に扱い、読解力が身に付く単元を開発し、児童の思考が広がる可能性を探ってみたいと考える。

(2) 研究の方法

文部科学省の示す「読解力向上プログラム」や「読解力向上に関する指導資料」と「小学校学習指導要領【国語】」とを関連付けた授業実践や単元の開発を行う。具体的には、まずは小学校国語第 4 学年の「一つの花」において、テキストを利用して自分の考えを表現する学習活動を取り入れた授業づくりと授業実践をする。児童の作品分析から考察し、授業づくりにおいて重要なことを明らかにして、読解力を高める授業構想を提案する。

2 先行研究の検討

本研究では、まずは「読解力」について捉える。

(1) 文部科学省の「読解力向上プログラム」

文部科学省は、「読解力向上プログラム」において、次のように述べている。

① 「PISA 型読解力」の定義・ねらい

PISA 調査における「読解力」は次のように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

PISA 型「読解力」では、義務教育修了段階にある生徒が、文章のような「連続型テキスト」及び図表のような「非連続型テキスト」を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるかについて、可能な限り客観的にみることをねらいとしている。

(2) 文部科学省「読解力向上に関する指導資料」

文部科学省の「読解力向上に関する指導資料」では、PISA 調査（読解力）の結果を踏まえた授業改善の方向について、次の3点を基本的な考え方として挙げている。

ア PISA 調査のねらいとするところは、現行学習指導要領で子どもに身に付けさせたいと考えている資質・能力と相通じるものであることから、学習指導要領のねらいとするところの徹底が重要である。

イ PISA 調査の結果から明らかになったことと、教育課程実施状況調査の結果とには共通点があることから、教育課程実施状況調査の結果を受けた改善の提言も併せて指導の改善に生かすことが重要である。

ウ 読解力は、国語だけではなく、各教科、総合的な学習の時間など学校の教育活動全体で身に付けていくべきものであり、教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要である。

ここで示されているのは、授業をこれまでのものとまったく異なるものにするという考え方ではない。「学習指導要領のねらいとするところの徹底が重要である」と述べているように、学習指導要領に示されていることを、どれだけ実現できるかが問われているのである。

また、平成 13, 14 年度教育課程実施状況調査の結果を踏まえ、次のような提言を示している。

相手や目的などに応じ、自分の考えを明確にして内容を構成していくという問題について、通過率が設定通過率を下回ると考えられる結果がでている。取り上げる言語活動において、児童個々の考えをまとめることを一層重視し、相互評価などを活用してお互いの考えを高め合うような工夫を行うことによ

り、児童自身の考えを明確にし構成する力を育成できるような指導の充実が求められる。

国語科の授業をよりよいものにしていくためには、「児童個々の考えをまとめる」という点を大切にしたり、「お互いの考えを高め合うような」授業を行ったりすることが必要であるとされている。

さらには、読解力を高める授業を工夫することができるよう、「指導のねらい」を7つに分類して示している。

まず、「テキストを理解・評価しながら読む力を高めること」に関連しては、次の3つである。

○目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

○評価しながら読む能力の育成

○課題に即応した読む能力の育成

次に、「テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること」に関連しては、次の2点である。

○テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

○日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

最後に、「様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること」に関連して、次の2点を挙げている。

○多様なテキストに対応した読む能力の育成

○自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

以上のようなねらいをもった授業を、国語科だけでなく、学校の教育活動全体で行っていく必要があるとされている。したがって、読解力向上のための授業づくりを行っていくためには、この7つの「指導のねらい」に対応する授業を工夫していくことになる。

本研究では、7つのねらいのうち、「テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成」を取り上げて授業づくりを考えていく。「読解力向上に関する指導資料」でも指摘されているように、児童は、自らの考えや感想を自由に記述することについては、できていることが多い。しかし、「課題や条件に応じて関連付けて表現すること」は、なかなかできないのが現状であろう。文章をよく読み、そこにある表現を根拠として書くこと、自分の考えや生活経験と結び付けて考えることなどは、これから伸ばしていかなければならない能力である。

井上一郎(2006)は、「読解力向上に関する指導資料」を踏まえて、「テキストを活用し読解するためには、自らの目的に沿ったテキストの内容理解に加え、各部分の関連や筆者の意図などを解釈しなければならない」と述べている。また、「そのテキストについて、内容や形式、表現方法等について自分の知識や経験と関連付けて評価すること」が必要だという。この考え方に立てば、テキストの活用や読解に必要なものを、以下の3点に整理することができる。

- ①「自らの目的」に沿った内容理解
- ②各部分の関連や筆者の意図の解釈
- ③自分の知識や経験と関連付けての評価

また、「テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成」を『『テキストを利用して自分の考えを表現する能力』とは、テキストの内容を要約・紹介したり、再構成したりしながら、自分の目的に沿った考えをつくり上げていく能力のことである。』と説明している。そして、このような能力を育成するためには、例えば、次のようなことが重要であると指摘している。

- テキストに基づいていること
- 自分の考えや生活経験と結び付けて考えを深めること

- 目的に沿って自分の考えを明確に書くこと

「自分の考えを書く」ことが、全く自分だけにしか理解できないようなものであってはならない。「テキストに基づいている」ことによって、他者と互いの考えを理解し合えるものにする必要がある。また、「自分の考え」の前提として、「目的に沿って」ということが挙げられている。単に「書く」という活動に取り組ませるのではなく、「目的」が重要なものとして位置付けられている。

3 実践と結果（明らかになったこと）

教職専門実習Ⅲにおいて、昨年度と同様に、山形市内A小学校で授業実践を行った。授業実践の対象となる児童も同じである。題材は、第4学年国語の「ひろがる言葉」(教育出版)の「一つの花」である。読解力を高める指導として、「テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること」の「テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成」に着目し、授業づくりを行った。

授業は全11時間で行った。単元計画の中には、2つの大きな柱を立てた。一つ目は、作品を読む

目的を明確にしたことである。お父さんかお母さんかどちらかの立場を選択し、「心の記録」と名付けた日記形式のワークシートを、読みとった心情に即して継続的に書く言語活動を設定した。2つ目は、登場人物の心情を読みとるための学習課題を、児童の初発の感想や友達との感想の交流の中で設定した。そうすることで、課題を解決するために作品を読んでいくという目的意識を持たせるようにした。単元計画は次のとおりである。

○単元計画(11時間)

時	○ねらい ・学習活動
1	○戦争の時代を生きたゆみ子やお父さん、お母さんのかかわり合いについて、意欲的に読もうとする。 ・戦争について知っていることやイメージを話し、「一つの花」の範読を聞いて感想を持つ。
2	○自分と友達の感想の共通点や相違点に気づき、各場面にタイトルをつけることができる。 ・感想を共有し、各場面にタイトルをつける。
3	○おもしろいところや疑問に思ったところの感想から心情の移り変わりを読む中心となる登場人物を設定し、学習の見通しを持つことができる。 ・心情の移り変わりを読んでいく登場人物(お父さん、お母さん)の立場を選択し、学習の見通しを持つ。
4	○各場面のお父さん、お母さんの気持ちを想像して
5	読んでいくために、学習課題を立てることができる。 ・グループを編成し各場面の学習課題を設定する。
6	○課題に沿ってお父さん、お母さんの行動や会話に着目し、各場面での心情を根拠となる叙述を明確にしながら想像して読むことができる。
7	○お父さん、お母さんの気持ちの移り変わりを叙述
8	に基づいて読むことができる。
9	○お父さん、お母さんの心情について「心の記録」(①～③)に表すことができる。
10	・学習課題についてお父さん、お母さんの心情を根拠となる叙述を明らかにしながら想像して読む。 ・読み取った心情に基づいて「心の記録」を書く。
11	○コメントカードでの交流を通して、自分と友達の読みの共通点や相違点に気付くことができる。 ・「心の記録」の交流会をする。

授業実践の分析では、作品をゆみ子のお父さんの立場から読んだ児童1名、お母さんの立場から読んだ児童1名の計2名を抽出した。児童の思考を各場面の「心の記録」や発言、様子から分析、考察し「テキストを利用して自分の考えを表現す

る能力」がどのように表れているのか考えていく。

○抽出した児童について

・A 児 積極的に意見を述べる方ではないが、周りの様子を見て挙手する。昨年と比較すると他の児童との関係の中でA児が意見を言う場面が増えている。友達の考えを自分の考えの中に取り入れて発言する姿も見られる。また、問いかけられたことに対する自分の考えを常に用意している。思いや考えを書くときにはそれが顕著に表れており、今回はお父さんの立場で作品を読んでいる。

・B 児 自分の意見や考えを、理由や根拠と合わせて述べるができる。周りの児童もB児の考えを頼りにし、肯定的に話を聞いている。分からないことがあったらどこが分からないのかについて発言する。また、少数派の考えであっても、周りに流されずに自分の考えを述べるができる。今回はお母さんの立場で作品を読んでいる。

○「心の記録」について

作品は児童の話し合いによって3つの場面に分け、各場面で「心の記録①～③」を書いた。場面にタイトルをつける活動も行った。

1 pp. 72-74 12 「お父さんやお母さんの願い」

2 pp. 74 13-77 「お父さん、いってらっしゃい」

3 pp. 78-79 「平和よ、つづけ」

(1) 心の記録① 「お父さんやお母さんの願い」

(A 児) 今日、「一つだけ。」の言葉を言ったゆみ子のしょうらいが心配になったよ。ゆみ子を高い高いして、喜んでいるゆみ子を見たら幸せだった。ゆみ子はどう思っているだろう。はあ。ゆみ子一つだけの幸せをおぼえてどんな子になるのだろう。すごく心配だ。ゆみ子がこの口ぐせをおぼえてしまったことをとてもこわいしている。だいじょうぶなのか。

A 児はゆみ子の父親の心情理解に意欲的に取り組み、物語の世界に入り込んでいる。

まず、「今日」という書き始めから、A 児自身が時間を設定した。これは、おそらくゆみ子を高い高いした日のことである。次に、「～よ。」「～だろう。」という文末表現に着目する。「ゆみ子のしょうらいが心配になったよ。」は、そのときの父親の真っ直ぐな思いが表れている。一方で、「ゆみ子はどう思っているだろう」、「ゆみ子一つだけの幸せをおぼえてどんな子になるのだろう。」は、心の中をめぐっている思いである。先行き不透明な不安な時代を憂い、ゆみ子の将来を心配する父親

の姿をA児は捉えているように思う。そして、「はあ。」は、父親がうまく言葉にできない複雑な思いを抱えていることを表した表現である。

内容の解釈に関わる場所では、「喜んでいるゆみ子を見て幸せだった。」と書いている。話し合いの中で「お父さんはゆみ子を高い高いしているとき、悲しい気持ちだったと思います。理由は、『深いため息』からそう思います。」という他の児童による発言もあり、A 児もこれが手放しに喜べる幸せだとは思っていないだろう。また、「ゆみ子はどう思っているだろう。」という言葉が続くのは、ゆみ子と楽しい時間を共有して幸せを感じている父親と、ゆみ子の将来を案じて、心の中で問いかける思いを抱えている父親のどちらの心情も捉えているからだと考える。父親の中にある様々な葛藤が、「はあ。」というため息の表現につながっている。さらに、「ゆみ子一つだけの幸せをおぼえてどんな子になるだろう。」と書いているが、作品の中で「一つだけ」に続く言葉として「幸せ」は出てこない。これは、A 児が戦争中にある唯一の「幸せ」が父親の高い高いであると解釈していたと推測する。

児童の話し合いの中で、「親は大人だし親だけど、自分のことも大事だと思う。」という考えと「親は自分のことより子どものことを大事に思うと思う。」という考えが出た。A 児はこのとき発言しなかった。しかし、後者の思いを持っていたことが、「ゆみ子がこの口ぐせをおぼえてしまったことをこわいしている。」というところから判断できる。それは、A 児が「心の記録①」の全体を通して、心配や後悔、父親として責任を感じているともとれる言葉を書いていたからである。

(B 児) 今からどうやって生きていけばいいのよ。「一つだけ。」以外に言葉をおぼえなかったらゆみ子のしょうらいはどうなるんでしょうね。お父さんが戦争に行ったらどうしようかなあ。わたしの分もゆみ子にあげなきゃいけないのは、しょうがないのかなあ。

B 児のグループでは、『『なんてかわいそうな子でしょうね。一つだけちょうだいと言えば、なんでももらえんと思ってるのね。』』と言ったときのお母さんの気持ちを「知る」という学習課題を設定した。そこで、心情を探るためにセリフを読んだり、想像した心情の根拠を作品から見つけようとしたりする姿が見られた。その中でB児は、「ゆみ子の

将来は心配だけど、あきれたり育てる自信があまりないっていうのもあると思う。」と発言した。その理由として「お母さんだってごはんを食べないと生きていけないし、ゆみ子のお世話をできないけど、ゆみ子は「一つだけちょうだい。」を言うからあきれない気持ちもあると思う。」と述べた。お母さんがゆみ子の将来を心配して不安に思う気持ちだが、育てる自信があまりないという考えとつながっているのだろう。周りの児童が「お母さんはゆみ子を守ってあげられるのは自分だけっていう責任があると思うから、あきれない育てる自信があまりないっていうのはちょっとちがうんじゃないかなあ。」と発言した。B児は、ゆみ子の将来を心配している点では、お母さんのゆみ子への愛情は理解しているが、その深さまではまだつかみきれていない。友達とのやり取りの中で、B児の心は揺れ動いていた。その様子が「心の記録①」の「わたしの分もゆみ子にあげなきゃいけないのは、しょうがないのかなあ。」に表れているように思う。

(2)心の記録②「お父さん、いつてらっしゃい」

(A児) ゆみ子にコスモスの花をあげて笑ってくれてうれしかった。戦争には行きたくないけど、ゆみ子を悲しませたくないから行かなきゃいけないんだ。さよならって言わなくてよかったんだ。ゆみ子が泣いてしまったら自分も悲しいし。あの時、ゆみ子はどんな顔をしていたんだろう。あの花は大切にしてくれているかなあ。今はゆみ子が悲しんでいないかなあ。自分が行ってから泣いてしまったかなあ。

A児は、ここでも父親の内にある思いを表現している。「戦争には行きたくないけど、ゆみ子を悲しませたくないから行かなきゃいけないんだ。」には、戦争に行きたくないという自分の思いと、ゆみ子を悲しませたくないという父親としての思いが混在している。文の終わりに書かれている「行かなきゃいけないんだ。」からは、この時代はそうは言っていられない時代であったことをA児が理解していることが分かる。また、「ゆみ子が泣いてしまったら自分も悲しいし。」以降に書かれている文からは、もう会えないだろうゆみ子に対する父親としてのあふれ出す思いが伝わってくる。これは、「心の記録①」を書くにあたって児童が話していた「親は自分のことより子どものことを大事に思うと思う。」という考えとつながっているように思う。自分のことよりゆみ子の方が心配でなら

ない父親の心情にA児は寄り添っていたと考える。

(B児) お父さんがゆみ子のえがおが見たかったのはわかるけど、お母さんのえがおは見なくなかったのかな。お母さんだって何ももらえなかったらえがおにしづらいのに。コスモスをお父さんからもらったらしお父さんが死んじゃってもコスモスを見ればおもしろいしえがおにしやすいの。でもお母さんとゆみ子のために戦争に行ってきたね。

B児は、父親を見送る母親の心情を想像するときも前時の影響を受けていた。「心の記録①」は、ゆみ子への真っ直ぐな愛情だけではない母親の言葉が書かれていた。そして今回は「お父さんがゆみ子のえがおが見たかったのはわかるけど、お母さんのえがおは見なくなかったのかな。お母さんだって何ももらえなかったらえがおにしづらいのに。」と父親に対する思いを書いた。B児は授業で「心の記録②」を書く前に「お父さんが汽車に乗っていくときに、お母さんはとにかくゆみ子の笑顔を見せたいと思っていたと思う。」と発言しており、父親を元気に見送りたいという母親の心情を理解していたことが分かる。そうすると、「お父さんがゆみ子のえがおが見たかったのはわかる」には、ゆみ子の笑顔を見せて送り出してあげたいという母親の気持ちも含まれていたと考えられる。

それでは、なぜB児が「母親もコスモスをもらいたかったに違いない」と考えたのかを推測する。ここでは大きく2つの理由が考えられた。一つ目は、母親の心情理解に努めようとするあまり、父親とゆみ子のつながりを第三者として見る立場には立っておらず、母親の立場で読み取った心情を主張していることにある。二つ目は、物語の父親の性格を今の自分の性格に引き寄せているため、物語の父親と実生活のB児の思いや行動の違いをなかなか理解できずにいることである。

B児は母親の父親に対する様々な思いに近づこうとし、「お母さんはとにかくゆみ子の笑顔を見せたいと思っていた」という気持ちを理解していた。しかし、授業の中で「お母さんだってお父さんと離れるのは悲しい気持ちだったと思う。」という発言もあった。これらのことから、B児の中には、どちらかといえば後者の気持ちが印象強く心に残り、母親が思いを主張するような「心の記録②」を書いたと推測する。

(3)心の記録③「平和よ、つづけ」

(A 児) ゆみ子、とっても良い子になってよかったなあ。はじめは心配してたけど、安心したよ。ゆみ子、一輪のコスモスをいっぱいにしてくれてありがとう。やさしい子になって良かった。コスモスを大事にしてくれてうれしいなあ。こんなにお母さんを手伝ってくれてありがとう。昔より、できることがふえて、お母さんもたすかるよ。自分は手伝えないけど、これからもお母さんをよろしくね。いつまでもおてつだいをしあけてね。

「ゆみ子、とっても良い子になってよかったなあ。」、「ゆみ子、一輪のコスモスをいっぱいにしてくれてありがとう。」からは、成長したゆみ子を温かい目で見ていることが分かる。また、前向きな言葉が多く見られ、ゆみ子への思いが優しく語りかけるような文章で書かれている。

「はじめは心配してたけど」は、これまでの父親の心情の移り変わりを押さえている。その上で、10年後のゆみ子に「安心したよ。」という思いでいることが分かる。また、この「安心したよ。」は「心の記録①」で「だいじょうぶなのか。」とゆみ子の将来を心配していたことに対応しているようにも思える。「昔より、できることがふえて、お母さんもたすかるよ。自分は手伝えないけど、これからもお母さんをよろしくね。」と優しく頼もしく成長したゆみ子の姿を想像し、父親の心情を言葉にした。「心の記録」の全体を通して、A 児は一貫して自分の目と父親の目を重ね、ゆみ子を大事に見てきたのである。

(B 児) ゆみ子は、あの戦争の時代からよく 10 年後まで生きてこれたね。ゆみ子は 10 年前のお父さんを覚えてないかもしれないけど、家の前にあるたくさんのコスモスを何回も見たらお父さんのことを思いだせると思うよ。お父さんは天国にいるからお母さんはたいへんだけど、ゆみ子がお昼を作ってくれと楽になるからもっとお昼を作ってね。お父さんも天国からゆみ子のことを見てるよ。

「ゆみ子は、あの戦争の時代からよく 10 年後まで生きてこれたね。」と書いた言葉の裏には「お母さんも安心して思う。ゆみ子はできることも増えたし良かった。」という授業における発言があった。また、「今はもう心配とか、育てる自信があまりないっていうのではないと思う。」というこ

とも併せて述べていた。

作品を通して母親の様々な心情と出会い、B 児自身も揺れ動きながら「心の記録」を書いてきた。そして、ようやくここで、これまでとは違う母親のゆみ子への思いに気づくことができた。「心の記録③」は①、②と同様に母親の立場で書かれている。しかし、これまでとは違い、文の中に何度も「お父さん」が登場する。これは、自分の立場を主張する母親よりも、いつも近くに父親がいると感じられるよう、ゆみ子に気遣う母親を、B 児が感じ取ることができたからだと考える。作品を読み進めていく中で、B 児が最後にたどりついたのはやはり母親の温かな愛情だったと考える。

4 考察

教職専門実習Ⅲでの授業実践を通して、「テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成」に着目し、読解力を高める授業を探った。その結果、重要であったのは次の3つの点である。

まず一つ目は、言語活動を明確にすることで、目的を意識しながら文章を読むことができるということである。今回は『心の記録』を書く」という言語活動を取り入れた。その活動を中心にしながら各場面の学習課題を児童が設定している。児童は「心の記録」を書くという目的に合わせながら、知りたいまたは考えてみたいと思う登場人物の心情を探っていたように思う。また、文章を読む目的を児童自身が理解していると、学習にも意欲的に取り組むことができる。実際に授業の中で、「今日も書くよね。」と聞かれることがあった。児童なりに、「今日はお父さんやお母さんの気持ちをどのように自分の言葉で書こうか」と考えながら、学習課題と向き合っているように感じた。

それに加えて、児童につけたい能力を焦点化し、思考の過程が積み重なるような言語活動を行うことも大事であることが分かった。今回、児童につけたい能力は「テキストを利用して自分の考えを表現する能力」であり、学習指導要領と重ねながら単元計画を立てた。様々な読む力がある中で、それをすべて同時に高めることは難しい。授業全体としての流れも見通して単元計画を立て、つけたい能力が毎時間の積み重ねによって、ついていくようにしなければならない。今回児童は、全体の学習の中で「心の記録」を3回書いている。各場面の登場人物の心情を読み取るだけではなく、

前時にどのように読みとっていたのかを踏まえた上で、本時の課題に取り組んでいた。A 児の「心の記録③」の「はじめは心配してたけど」にもあるように、多くの児童が「心の記録」を読み返し、登場人物の心情の移り変わりを考えながら読むことができています。

二つ目は、自分の考えを見つけることが重要だということである。「お父さんがゆみ子を高い高いしていたときの気持ち」について考えたとしても、そこからは様々な心情が読み取れるし、どのような心情に自分が一番思いを寄せられるかによって、「心の記録」に書かれることは違っていた。「どんな子に育つのか心配になった。」と書く児童がいれば、「高い高いをして、今のうちはゆみ子を喜ばせてあげたいなあ。」と書く児童もいた。これは、自分の考えの根拠はテキストの中に見出す必要があっても、正解は何かと探ったり一つの考えに限定したりする必要はないということである。だからこそ、学習課題は児童一人一人の考えが表れるような問いかけにならなければならない。

三つ目は、二つ目に述べたこととも関連して、自分の考えに根拠や理由を持つということである。自分の読み方や考え方に正確さや分かりやすさを持たせるために、テキストを根拠として述べていく必要がある。

○授業の構想

授業実践を通して考察したことを受けて、「読解力向上に関する指導資料」で述べられている他の読解力を高める指導のねらいにも目を向け、新たに単元を構想する。題材として取り上げたのは、「新しい国語 4 年下」（東京書籍）の『ごんぎつね』である。次のような単元の構想を考えた。

	○ねらい ・学習活動
第一次 6 時間	○「きつね」をテーマにしたいろいろな本を友達に紹介するために読もうとする。 ・これまで学習してきた物語に出てきた「きつね」の性格や行動について思い返す。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">いろいろな「きつね」と出会い、友だちに紹介しよう</div> ○『ごんぎつね』について感想を交流し、友達に紹介したい作品の良さを見つけ、紹介カードを作る。 ・『ごんぎつね』の教師の範読を聞く。 ・『ごんぎつね』を読んで、印象に残ったところや物語の良さ、おもしろさについて感想を交流する。 ・友達に紹介したいことを見つけ、紹介カードを書く。

	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と互いに紹介カードを見合って、相手に伝える紹介カードの書き方について話し合う。 ○「きつね」が登場する物語を読み、性格や気持ちの変化、物語の展開について読むことができる。 ・おもしろそうな本や読んでみたいと思う本を選び、読書する。 ・読書カードに、登場人物や物語全体についての気づきや感想、印象的な言葉や挿絵など本の情報を書く。
第二次 2 時間	<ul style="list-style-type: none"> ○紹介したい登場人物や物語全体の良さ、おもしろさについての紹介カードを作成することができる。 ・友達に紹介したいことを選び、紹介カードを作る。 ・紹介カードをもとに、友達への紹介の練習をする。
第三次 2 時間	<ul style="list-style-type: none"> ○本の紹介活動を通して「きつね」が主人公のいろいろな物語に触れ、それぞれの物語の良さやおもしろさを感じようとしている。 ・本の紹介活動を通して友達の紹介の良さを認め、感想を交わしたり質問をしたりしながら交流する。

はじめに、読解力を高める指導として、「読解力向上に関する指導資料」にある「様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること」の中の「多様なテキストに対応した読む能力の育成」に注目した。この能力と「小学校学習指導要領【国語】」の指導事項「目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと」とを関連付けて、児童が目的を意識しながら文章を読む。教科書（東京書籍）にある既習の文学的な文章には「花いっぱいになあれ」や「あしたも友だち」、「手ぶくろを買いに」など、「きつね」を主な登場人物としているものが多いことに気がついた。各作品に出てくる「きつね」は性格や行動こそ違っているが、それぞれの作品には独自の良さやおもしろさがある。そこで今回は、「きつね」をテーマに読書活動を展開する構成とした。自分なりの考え方や感じ方で、「きつね」が登場する物語の良さやおもしろさを見つけていく。それを友達にも紹介したいという思いが読む目的になると考え、言語活動とした。

物語を友達に紹介するにあたっては、その物語について自分なりの読みがあるということが前提となる。したがって、児童がその物語の登場人物の性格や気持ちの変化、物語の展開のおもしろさなどを読み取ることなしに友達に紹介することは

できないだろう。そこで、まずは『ごんぎつね』を共通教材とし、紹介の仕方を全体で考えていく。ここでは、どのような紹介カードが良いかを児童が考えられるようにすることが目的のため、登場人物の心情や情景についての細かい読み取りは行わない。描写や挿絵、あるいは自分の感想などを手がかりに、友達に紹介したいことを選び、自由に紹介カードを書かせるようにする。そして、全体でカードを見合って、本を紹介する上でカードに書かれると良いことについて話し合う。このような全体での活動を取り入れることで、児童は紹介カードの大まかなイメージをつかみ、友達に本の良さやおもしろさを紹介するためには、細かい読み取りも大事だということに気づくだろう。

次に、今度は個人で「きつね」の出てくる物語を選び、友達に紹介するための準備へと学習は移る。ここでは、「小学校学習指導要領【国語】」の指導事項「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」を押さえる必要がある。具体的には、同じ本を選んだ人同士で疑問に思うところや気になる部分などについて話し合い、登場人物について理解したり、その本を読んだことがある友達に分からない表現を尋ねたりしながら学習を進める。叙述を基にして想像したり根拠を明らかにして自分の考えを広げたりしながら、自分の読みを追究していくような時間にしていきたいと考える。自分が物語の良さやおもしろさに気づくことができれば、おそらく友達に紹介したいという思いは高まっていると考えられる。

第二次には、「友達に伝える」という相手意識を持って本の紹介カードを作る。ここで大事にしたいことは、「読解力向上に関する指導資料」の「様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりすること」にあるもう一つの「自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成」である。単にあらすじを紹介するようなカードではなく、自分の読みが反映するようなカードにしていく必要がある。つまり、自分が感じたことや考えたことがカードに書き込まれている必要がある。さらに、それらの文章が感想の羅列にならないよう、簡潔さと分かりやすさの視点を持って紹介したいことを書くように工夫する。また、紹介したい内容はそれぞれであると予想されるので、書く内容は統一しなくても良いと考え

る。自分は友達に何を紹介したいのかを明らかにすることが重要なことである。

本の紹介活動は、「私の紹介カードを見て、みんなおもしろそうって言っていた。うれしかったなあ。」「友達が紹介してくれた優しいきつねの話を読んでみたいなあ。」というような思いを児童が持ち、友達の紹介の良さを認め合えるような時間にしていきたい。紹介カードは図書室に置いていつでも見られるようにし、児童の学習の成果を学校生活に反映させることも大切だと考えている。

本を紹介する様子や紹介カードの内容はもとより、友達に紹介された本を読み、本を通して児童が交流している姿を見ることができれば、読解力の向上に結び付いているのだろうと考えている。

5 到達点と課題

本研究では、「小学校学習指導要領【国語】」と関連付けた授業実践と単元の開発を行った。授業実践を通して、児童の作品を分析し、思考を考察すると、目的を意識しながら文章を読むことや思考の過程が積み重なる言語活動を設定すること、自分の考えに対して根拠や理由を持つことが重要であると分かった。

本研究は、中学年を対象としてきたが、他学年における読解力を高める授業づくりにも必要である。そこで、今回立てた授業構想を他学年においても活かす方法を考えていきたい。また、他の「読解力を高める指導のねらい」にも目を向けながら、さらに授業構想を増やして授業実践をしていきたい。今回は扱わなかった説明的な文章での読解力を高める授業づくりの可能性も探っていきたい。

今後も、「小学校学習指導要領【国語】」と「読解力向上に関する指導資料」に挙げられている7つの指導のねらいを関連付けながら、継続的に授業づくりを行い、授業実践において一つ一つ効果を検証していくことが筆者の一番の課題である。

引用・参考文献

- 中央教育審議会、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」、1998
- 井上一郎(他)：『読解力向上をめざした授業づくり』、東洋館出版、pp.8-11、2006
- 文部科学省、「『読解力』向上に関する指導資料 読解力向上プログラム」、2005